

「教育のつどい 2014 in 香川」へ参加して

群馬県高等学校教職員組合教文部長 上原 真司（前橋工業高校）

「教育のつどい 2014 in 香川」が8月16～18日、香川県高松市で開催されました。参加人数は3日間でのべ5100人にのぼり、討論と交流が行われました。群馬高教組からは、レポーターである太田フレックス高校の神保聡志先生と、教文部長の上原の2人での参加となりました。

開会全体集会

大学生による華麗なダンスで幕を開けた全体会は、朗読、サヌカイト演奏、合唱へと続きました。「サヌカイト」とは、讃岐岩と呼ばれる、叩くと澄んだ高い音のする岩石でできた石琴です。このサヌカイトの伴奏に合わせて、参加者全員の歌声で「故郷」が会場に響き渡りました。



（松本・小森対談）

対談「いま、憲法を守り、生かす ―福島、平和、子どもたちに思いを寄せて―」では、いわさきちひろさんのお孫さんである絵本作家の松本春野さんと東京大学教授で9条の会事務局長でもある小森陽一さんのお話を聞くことができました。子どもは絵本を通して「共感」と「思いやり」を楽しみ、互いの違いを認めた上で相手を受け入れるという人権の基本を学ぶことができると、お二人は話されていました。また松本さんは、権利の中でも一番大切なのは知る権利であり、子どもが情報を取捨選択できることが大切だと話されていました。松本さんの祖父母の性格の違いを分析しながら、受けた教育により性格は変わる

という結論を導き出し、会場を笑いに包みましました。

また松本さんの祖母である、いわさきちひろさんの「戦火のなかの子どもたち」が、なぜ他の作品と異なる印象を与えるのかについても解説していただきました。この絵本では、人と視線を合わせることができない子どもが描かれています。いわさきちひろさんには、そのような子どもたちの存在をなかったことにしてはいけない、という強い思いがあったそうです。同じ思いから、松本さんは震災後の福島県の子どもを主人公とした「ふくしまからきた子」を描かれました。お話を聞いて、絵本作家の中にある子どもの心に寄り添おうとする気持ちに深く感銘を受けました。

対談の最後には、松本さんが録画した高校生のデモの様子が映し出されました。子どもたちが官邸前で、「安倍さん愛して！ちゃんと守って！」と叫んでいる様子は会場にいた人の心を打ち、私たちがしなければならぬことは何かを、改めて考えさせられました。

教育フォーラム

教育フォーラム「安倍『教育再生』ストップ！憲法を守りいかそう」では、安倍「教育再生」において民主主義と立憲主義が危機的状況に陥っていることを踏まえて、4名のシンポジストからの報告を中心に議論を深めました。

教科書問題では、検定審査要項が変更されたことにも触れ、不合格を恐れた出版社が萎縮し、自主規制がはたらいってしまう仕組みを説明していただきました。

香川県では教員の中に管理に疑問を持たない人が増えていることや、福岡県では小中一貫校などの教育政策が推し進められ、財界の求める人材づくりに力が入っていることについて報告がありました。

会場からあがった、「親の子どもを思う気持ちを逆手に取った政策が行われている現状を、親たちにわかりやすく伝えていく必要がある」という声に、私も強く共感しました。子どもたちに本当に必要な教育とは何か、身につけさせるべき力とは何かを考え、それを教師だけではなく父母とも共有していくことが、現状を改善していくために重要であると強く感じました。

また、高校生による「教科書に真実が書かれないのがおかしい。真実を知った上で、どうするかを考えるべきであって、真実がわからない状態では考えられない」という発言は大変印象的でした。子どもの権利条約にある「意見表明権」を確かなものにするためには、自分なりに考え、意見を持つための十分な情報が子どもたちに与えられている必要があります。そのためには、まず私たち大人が情報を十分に吟味し、真実を追究し続けなければなりません。子どもたちの「知る権利」を守るために、私たちには非常に大きな責任があることを強く実感しました。

分科会（理科教育）

理科教育の分科会では、理科教、の置かれている現状について議論を深めました。自然科学教育への管理が強化され、エリート育成に重点を置いた政策や、グローバル市場で勝ち抜くための科学・技術が求められていることについて報告がありました。私たちが、自然の圧倒的な破壊力と人間の非力さ、科学と技術の未熟さを知ることとなった東日本巨大地震を例に、私たちは次世代に何を伝えるべきなのか、という問題が提起されました。討論を通して、「授業をつくることは教師の責任であり、権利である」ことを意識すること

が大切であると、改めて強く感じました。

分科会（社会科教育）

社会科教育の分科会では、神保さんのレポート「実教出版『高校日本史A』の教科書を使った授業～日本の軍国主義と国旗・国歌～」の発表を受け、参加者から「教科書によってこんなに内容が違うことに驚きました」という声があがりました。この教科書の編集に携わっていた出版労連（出版関連産業に働く人たちの労働組合）の方からは、「このように授業で使ってもらえるのは編集者冥利に尽きます」との発言もありました。私も神保さんの発表を聞き、生徒の「知る権利」と「意見を表明する権利」を守る素晴らしい取り組みであると感じました。



（日本史授業実践を報告する神保先生）

社会科教育分科会で発表されたレポートには、他にも素晴らしい実践が多数あり、「教師自身が一番の現物教材」という認識で皆が一致したものがいくつかありました。元海上自衛隊の自衛官だったという高校教諭の方は、実体験から「国は自衛隊員を守ってはくれない」と生徒に伝えていることを話されていました。そのような話をする時、普段は寝ている生徒も顔を上げて話を聞くようで、参加者の共感を得ていました。

自分の専門と異なる他教科の分科会へ参加することは非常に学ぶことが多く、これも教育のつどいの大きな魅力であると感じました。